

ソフトボールが
つながる高崎との絆

公益財団法人日本ソフトボール協会副会長
宇津木妙子さん

TAEKO UTSUGI Present

『よそ者』からののはじまり。
大切にしてきたのは
郷土愛、ソフトボール愛、
企業愛

ユニチカ垂井の現役時代、高崎の横尾製作所と決勝戦で当たったことがとても印象深く残っているという宇津木さん。

横尾製作所はその後太陽誘電にチームが変わり、スポーツ選手としてその変遷を見てきた。現役引退後、当時の日立製作所高崎工場から招かれ、コーチに就任することになった。岐阜県垂井から実家の埼玉に戻り、高崎の地で12名の選手と1部リーグをめざし走り出した。コーチ就任時は全くの『よそ者』だったというが、その後監督となり夢の実現に向けて邁進する中で、周囲も自分も『よそ者』意識が変わって来たという。従業員をはじめ

地域の協力は強大で、高崎は他の都市と比べてもスポーツ支援が強力な土地柄だと実感した。だからこそ、企業スポーツとしてこのチームがどうあらねばならぬかを常に考えて来たという。「始めた当時は上ばかりを目標にやれたのである意味楽でした。周囲も勝ったら喜んでくれる。問題はそこからです。チームが力を

つけてくると、明確な目標として何をやればいいのかをその都度選手に伝えました。ひとつひとつ山登りみたいにチームを作ってきたのです」。そう語る宇津木さんの言葉に、厳しくストイックな姿勢で選手と向き合ってきた背景が見える。

「日本では、野球はメジャーで、ソフトボールはメジャーではない地味なイメージがありました。その中で、高崎を中心にビックカメラと太陽誘電さんが切磋琢磨して日本一、世界に向けてやっているのは大きい事です。愛知県にはトヨタグループでチームが3つあり、いつもライバルがいて成長できます。当時、私も誘電さんがなければこんなに頑張れなかったと思います」。

7回2アウト、4-0で勝っていたのに最後に逆転負けしたことがあった。勝負の厳しさを改めて知り、勝つ喜びはもろろのこと、負ける悔しさは、自分たちだけのものではないことも痛感した。選手と従業員、そして何より地域の人達と共にあるのだと。地域郷土に支援されなければ企業スポーツとして成り立たない。選手達にはそのことを常に意識する



ように指導した。郷土に自信を持ち、高崎市民の代表、企業の代表として自覚を持つようにと。チーム名に高崎が入っていることは非常に大きなことで、世界にその名を向けていく使命感が自然と生まれてくる。郷土愛、ソフトボール愛、企業愛が、選手と地域を結びつけていくのだと実感している。

これまで数多くの企業チームの廃部を見てきたという宇津木さんだが、これほどまで同じ地域で引き継がれていくケースは高崎を置いて他にないと言う。一つは、ナショナル木材から横尾製作所そして太陽誘電へ、もう一つはルネサス高崎(旧日立高崎)からビックカメラ高崎へとチームが引き継がれた。廃部になって選手がバラバラになる姿を他で見ているだけに、チームがほぼそのまま、その地域で存続していきけることのありがたさ、地域の理解度の高さを身にしみて感じているという。それは選手たちのプレーに

も反映される。皆、使命と責任を感じながら努力を惜しむことがない。それを裏付けるかのように今

年度、日本女子ソフトボールリーグにおいて、ビックカメラ高崎は創部1年目にして初制覇を成し遂げた。地域への恩返し気持ちは後押しをしたと考えても違いないだろう。

ピンチを凌ぎチャンスはどういからか。チームだけでプレーをしているのではない。

宇津木さんにとって、ソフトボールは人生そのもの。プレイボールが掛かったら、ピンチがあり、チャンスがある。ピンチを凌ぎ、チャンスをどういからかはそのチームの力だけにかかっているわけではないのだ。チームを超えた個の力、ベンチの役割、応援する人、それらが一体とならないと勝てない。そのことをソフトボールから学んだと宇津木さんは語る。だからこそ、後世にもそれを伝えていきたいと思っている。情報も物資も豊かな現代、子どもたちに弱さを感じてしまうことが少なくないという。何か一つのことに集中し、達成する力を養う機会が薄れているのかもしれない。一つの目標に向かってがむしゃらにやるような環境は、心を強くし生きる力を育ててくれるものだ。NPO法人ソフトボール・ドリームが力を入れて取り組んでいることに、現役選手と子どもたちの交流事業が

ある。スポーツで活躍する選手と一緒に汗を流すことは子どもたちにとって貴重な機会だ。憧れを強め、あんな風になりたいと思える大人が身近にいることは素敵なこと。辛いことがあっても、こんな楽しいことがあると、スポーツを通して伝えていきたいと力をこめる。また、今年世界野球ソフトボール連盟の理事になり、日本のみならず、世界規模でのソフトボールのあり方を考える立場となった。応援され親しまれる組織を作っていくために、何が出来るのか。現場に行き、自分の目で見て、周囲の声を聞き、一緒に体を動かしながら、さまざまな声を届けていきたいと思っている。

人とのつながりが世界を広げる

地域とコミュニケーションを図ることは、地域活性につながっていく。1部リーグをめざしてスタートした高崎での活動は、確実に実を結んでいる。日本代表メンバーの過半数を高崎の2企業チームメンバーが占め、それは市民の誇りへもつながっている。シドニーオリンピックの後、高崎駅から市役所までオープンカーでパレードをした際、沿道には子供から大人まで小旗を振る人々で埋め尽くされた。「感動をありがとうと言われた時は、嬉しかった。忘れられないですね」。

高崎での活動も31年を迎えた。群馬の空っ風にあおられて頑張る力が育まれたり、かかあ天下といわれる土地柄で女性があつかりと暮らしを守っていると感じてきた。風土が人を作り、地域を形成していくのを肌身で感じている。「この自然環境の中で育まれる人情味のある人たち。最後は人だと思えます。人とのコミュニケーションを図ることは、自分が自分らしく生きられるということ。すべては人のお陰」。

宇津木妙子

(公益財団法人日本ソフトボール協会副会長)

高校卒業後に実業団チームで活躍。選手として引退後には日立高崎女子ソフトボール部監督に就任し、当時3部のチームを2年で1部に昇格させ、1990年には優勝するなど強豪チームへと成長させた。1997年には日本代表監督に就任し、シドニーオリンピックで銀、アテネオリンピックで銅メダルへ導いた。現在はNPO法人ソフトボール・ドリームを立ち上げ、ソフトボールの素晴らしさを日本及び世界中に伝えている。

※2015年9月に渋谷ヒカリエで行われた『高崎博覧会』のトークイベントの内容をまとめたものを掲載しています。